

# 自らが経験したことを伝える力を育てる自立活動の指導

○角原佳介

仲矢明孝

（岡山大学教育学部附属特別支援学校）

（岡山大学大学院教育学研究科）

KEY WORDS: 自立活動, 自閉スペクトラム症, パーソナルナラティブ

## 【はじめに】

過去の経験や架空の物語等を語る行為、及びそこで語られるものはナラティブと呼ばれ、自己の経験を語るパーソナルナラティブ(以下 PN)と架空の物語を語るフィクショナルナラティブ(以下 FN)の 2 つに分けられる。本研究では、自らが経験したことを伝えることに難しさのある児童に対して行った自立活動の指導の結果を整理・分析することにより、PN に関わる指導の在り方について検討する。

## 【方法】

### 1. 対象

対象は、知的障害特別支援学校小学部 4 年男児で、自閉スペクトラム症と診断されている。20XX 年 7 月に実施した LC スケールでは、言語表出: LC 年齢 3-10, 言語理解: LC 年齢 3-9, コミュニケーション: LC 年齢 4-5, 総合: LC 年齢 3-11 であった。なお、対象児の保護者及び所属機関には研究目的と方法について説明し、研究参加への同意を得た。

### 2. 指導期間と学習課題等

20XX 年 9 月～20XX+1 年 2 月の約 6 か月間、原則週 2 回（1 回約 40 分間）、「自分の経験したことを相手に伝えるように話すことができる」を指導目標として、個別による自立活動の指導を行った。指導目標達成に向け、段階的、計画的に学習課題を設定した(表 1)。各学習課題の指導手順を表 2 に示す。教師は、説明場面(\*)では、相槌と復唱、次の話の促し、対話場面(\*\*)では、質問や内容の補足等を行った。質問は、「他には?」「それで?」等(場面)、「最初は?」「それから?」「次は?」「おわりは?」等(順序性)、「誰が?」等(人物)であった。

表 1. 指導期間と学習課題等

指導	期間	種類	学習課題
I 期	20XX 年 9 月～10 月 (全 8 回)	FN	○絵本の内容の説明 ・絵本「こぐまちゃんのどろあそび」 ・絵本「こぐまちゃんのみずあそび」
II 期	20XX 年 11 月～ 20XX+1 年 2 月 (全 10 回)	PN	○個別指導での活動内容の説明 ・スライム作り⇒スライム遊び ・魚作り⇒魚釣り遊び ○生活場面における経験内容の説明

表 2. 指導手順

期	I 期:絵本	II 期:活動
手 続 き	①読み聞かせ ②内容説明(*) (8 回) ③イラストの並び替え ④内容についての対話(**) (8 回)	①活動内容の理解 ②活動 ③内容についての対話(**) (10 回) ④学級担任への説明(*) (6 回)

### 3. 記録・分析方法

指導場면을撮影したビデオ録画の中から、教師の発話等の影響が少ないと考えられる各期の説明場面(\*)を抽出し、教師と本児の会話のプロトコルを作成し、分析した。

## 【結果】

### 1. ナラティブ構造レベルの変化

本児のナラティブ構造を評価するため、大原ら(2018)を参照し、レベルを定義した(表 3)。定義に沿って説明内容のレベルを同定した結果、各課題の開始時のナラティブ構造レベルは低く、また、I 期の FN に比べ、II 期の PN の方が高い結果を示している(表 4)。

### 2. プロトコルからみたナラティブの特徴

#### (1) I 期:絵本の説明における特徴

第 1, 2 回は、「ケンカをしていた」等、関心の高い場面

表 3. ナラティブ構造レベルの定義

レベル	定義
1	絵本や歌のフレーズを繰り返すのみで、物語として語っていない。
2	単一の出来事のみで話す。
3	2つの出来事について羅列する。
4	2つ以上の出来事について、時間的な因果性を踏まえず、列挙する。
5	出来事間のつながりに乏しく、欠落等もあり、聞き手に推察する努力を要する。
6	時系列的にストーリーを語るが、クライマックスが設定されていない。

※大原ら(2018)を基に筆者が一部修正した。

表 4. 各指導におけるナラティブ構造レベル

実施回数	1	2	3	4	5	6	7	8
I 期絵本	1	3	3	4	3	3	6	6
II 期活動	3	4	6	5	5	5		

にのみ言及していたが、第 3 回以降、「あとは」という言葉を用い、より多くの場面に言及するようになった。第 5 回から、「あとは」が減少し、「最初は」「次は」など、順序性を表す言葉を用い、正しい順序で話すようになった。第 7, 8 回は、「どろまみれ、まるでアーモンドみたい」等、絵本にない言葉も使い、総発話数も徐々に増加した。

#### (2) II 期:活動の説明における特徴

第 1 回は、「スライムを作りました」のみの発話であったが、第 2 回以降、「最初は洗濯糊をいれて、次は絵具で色を付けました。」等、作る工程を話すようになった。指導経過に伴い、各場面に言及するようになったが、遊びの活動場面に比べ、作る活動場面への言及は少なく、それぞれの活動場面を合わせても総発話数は I 期より少なかった。

## 【考察】

I 期、II 期とも指導経過に伴い、ナラティブ構造レベルは上昇し、各課題における説明では、場面、順序性、人物の内容への言及が増えていた。さらに、I 期に使い始めた順序性を表す言葉が、II 期でも継続して使われており、I 期に行った FN の指導の効果が推測される。また、本児は各課題における対話場面(\*\*)での教師の質問や補足等の説明を受け止めて対応しており、教師に質問されたことを自分が話す内容として理解し、説明内容を変化させていったと考えられる。

一方で、総発話数は、I 期に比べ、II 期は減少している。I 期の FN の指導では、絵本のページごとに場面が分かれ、内容も整理されていた。しかし、II 期の PN の指導では、自身の経験を客観的に捉え、周囲の状況を整理して把握し、表現することが求められるのであり、これらの困難さがあったと推測される。PN の指導においては、視覚支援を活用する等、本児が自身の経験を客観的に整理して把握するための支援の必要性が示唆される。

I 期の絵本の課題について、本研究では、FN として扱っている。しかし、見聞きした絵本の内容を話すことと架空の物語を創造して話すことでは、そこで必要とされる力は異なると考えられるのであり、絵本の扱いについては、今後の検討が必要と考えている。

## 【参考文献】

大原重洋・廣田栄子(2018)聴覚障害児におけるハイポイント分析法を用いた書記ナラティブ発達の検討。音声言語医学, 59, 209-217.

(KAKUHARA Keisuke, NAKAYA Akitaka)